金沢学院大学 名誉教授
東四柳 史明（ひがしよつやなぎ ふみあき）

第22回 井上俊清の能登乱入と富来院木尾嶽合戦



木尾嶽城跡から富来湾を望む（現志賀町富来地区、2021年 山崎貞雄氏撮影）

南北朝内乱初期の北陸では、越中の前守護井上俊清と能登守護吉見頼隆の間で、両国の支配をめぐり、局地的な合戦が展開されていた。俊清は越中の豪族で、足利尊氏による後醍醐天皇の建武政権打倒に呼応し、建武２年（1335）11月、越中国司中院定清を越中・能登国境の石動山に追い、討死させた功などにより、建武４年（1337）７月頃越中守護となり、暦応元年（1338）以降までその地位に在った。しかし在職中に幕府の通達執行を懈怠したことなどで、守護職罷免と所領の没収にあい、幕府を離反したため、尊氏から誅伐を蒙る身となっていた。

一方、吉見頼隆は、足利尊氏の下で当初能登・越中両国守護を兼任したが、井上俊清の越中守護就任にともない、能登一国守護となった後も、尊氏党（室町幕府）の北陸における中心的存在であった。

吉見頼隆の越中国凶徒討伐

康永３年（1344）10月、能登守護吉見頼隆は、室町幕府から越中国の凶徒井上俊清以下を討伐するため、能登国の地頭御家人等を率いて、越中への進発を命じられた。次いで翌４年３月７日、頼隆を大将とする能登勢は越中国に向かい、同国の各地で数度の合戦を重ねた後、７月11日、既に占拠し在陣していた上市川河口にある新川郡の高櫬河原要害（現滑川市高月町）で敵方の攻撃を受けたが、能登武士の得江頼員・得田章名等が防戦に奮闘し、敵軍を撃退した。

その後貞和２年（1346）７月になって、同郡の松倉と水尾南山（現魚津市内）の要害（城）を攻撃した際には、敵方の頑強な抵抗に遭って激戦が展開され、同月19・20日の両日にも、再び水尾城を攻撃したが決着をみなかった。しかし同年の閏９月、敵将の井上俊清が降伏を願い出たため、一旦は休戦となった模様である。

またこの越中の合戦には、能登の吉見軍と共に、当時越中守護となっていた桃井直常勢も参戦していたが、苦戦しているとの情報が京都に伝わっており、能登勢の攻勢に対し、井上俊清方は頑強に抵抗を続けていたらしい。

	北朝（足利尊氏・直義）		南朝（後醍醐天皇）
南朝へ攻撃	井上俊清（越中守護）		中院定清（越中国司）
越中討伐 能登の攻防	吉見頼隆（能登守護）・氏頼、桃井直常（越中守護） 得江頼員（志雄保地頭）、得田章名（得田荘地頭）・章真	対立	井上俊清・新田貞員 栗沢政景・富来俊行
観応の擾乱 富来俊行の再起	足利尊氏党（幕府軍）	足利直義党（尊氏弟）	南朝
	足利尊氏・義詮（嫡男） 高師直（執事） 桃井兵部大輔（能登守護） 吉見頼隆・氏頼（能登守護）	対立 桃井直常（直義重臣） 富来斎藤次	富来俊行 井上布袋丸

越中・能登における南北朝時代の対立図

井上俊清の能登進攻と木尾嶽籠城

能登の吉見頼隆軍が、越中の松倉・水尾南両要害で井上俊清勢を攻略するに先立つ貞和２年３月６日、俊清と新田貞

員・栗沢政景・富来彦十郎俊行らが、越中から能登に攻め入り、羽咋郡の木尾嶽に楯籠って、越中に出陣中の吉見氏の後方攪乱を企てる軍事行動を起こした。

木尾嶽の要害は、井上俊清に与して越中に赴き、吉見軍と戦っていた富来氏の本拠地富来院貝田村に所在する城砦であった。恐らく富来俊行の誘導によって、能登に乱入したものと思われる。

また井上勢の中に、越前で討死した南朝後醍醐天皇方の新田義貞の一族残党と思われる新田貞員が加わっていることや、当時南朝方による能登武士への招誘工作がみられていたことから、幕府方の吉見軍と戦う井上俊清は、南朝方に通じていた可能性がある。

それに対し能登守護吉見頼隆は、急遽子息の氏頼を大将とする能登勢を富来院に向かわせ、叛乱の制圧にあたらせた。３月16日、氏頼軍は木尾嶽の城郭に攻め寄せ合戦に及び、同月18日にも、同城の大手に押し寄せて、激しい攻防戦を展開した。その後、同月23日と25日以後にも、度々合戦が繰り返された。しかし決着をみなかったらしく、５月４日になって、ようやく木尾嶽城は陥落したとみえ、２カ月間続いた富来院木尾嶽の合戦は落居したが、井上俊清・富来俊行らは、密かに同城を脱出し、越中や能登の地に潜んで反撃の機会を窺うことになる。だが、井上俊清等の幕府に対する北陸の叛乱は未だ終熄しておらず、貞和３年（1347）11月、足利尊氏が能登武士の得田章真に対し、井上俊清討伐のため、越中守護の桃井直常を越中に下向させるにあたり、一族を率いて参陣するよう命じている。その後、同４年10月12日になって、能登守護となった吉見氏頼が、得田章真らの能登勢を率いて、井上俊清の楯籠る越中松倉城を攻め落していた。

富来俊行の再起と能登の合戦

貞和５年（1349）閏６月、室町幕府を支える将軍足利尊氏の弟直義と執事高師直の不和を契機に、尊氏・直義兄弟の対立にともなう、幕府の分裂抗争による内乱（観応の擾乱）が起こると、北陸では越中守護を罷免された直義党の桃井直常が、尊氏党の能登の守護桃井兵部大輔（盛義ヵ）勢と合戦を展開することになる。

この間を突いて、それまで能登に雌伏していた富来俊行・井上布袋丸らが、桃井直常と結んで富来院で蜂起し、鹿島郡の花見槻（現中能登町花見月）に進んで、能登の守護勢と合戦に及んだ。

その後、直常方の能登勢は、羽咋郡飯山（現羽咋市内）の合戦で敗北して越中に退くが、やがて康安２年（1362）５月に至り、富来院木尾（嶽）城を能登守護に復帰した吉見氏頼が攻略し、桃井直常党の富来斎藤次以下を討捕った。その後同年８月になって氏頼は、同院の尾崎（所在地不明）・木尾両城を攻め落としている。斎藤次は富来俊行の一族らしく、南北朝中期に至るまで、富来氏の本拠であった富来院（現志賀町富来地区）は、尊氏党の能登守護勢力に対する抵抗の拠点となっていた。

富来氏は、鎌倉幕府の法曹官僚であった三善氏一族の富来院の外来地頭で、鎌倉幕府の問注所公人として知られる富来光行・同光康は、同院の地頭であった可能性がある。また鎌倉末期の正和３年（1314）５月には、院内の階田村地頭の富来左衛門三郎行倫が知られ、南北朝の合戦に登場する貝（階）田地内の木尾嶽の要害は、鎌倉時代以来、非常時に富来一族が楯籠る城砦であったと思われる。

富来氏が足利尊氏の室町幕府に抵抗する能登の政治勢力であり続けた理由は定かでないが、富来院の地が伊勢神宮に供御として魚介類を納める御厨（神宮領）でもあったことから、南朝方と結びつく政治的要因があったものかもしれない。



山頂に木尾嶽城跡が残る通称「城ヶ根山」



南北朝時代初期における越中・能登の合戦